

石牟礼道子歌集

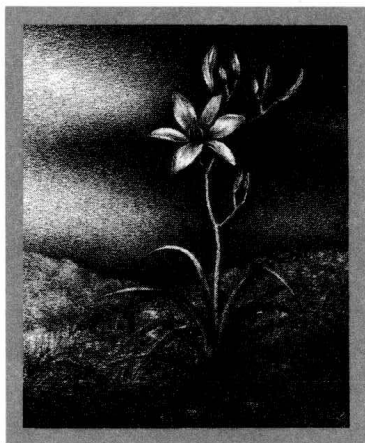
海と空のあだに

葦書房

と空のあいだに

石牟礼道子歌集

葦書房



歌集

海と空のあいだに

一九八九年六月一日初版印刷
一九八九年六月十日初版発行

著者 石牟礼 道子

発行者 久本 三多

発行所 葦書房有限公司

福岡市中央区赤坂三丁目一番二号
電話 福岡 ○九二(七六一)二八九五

振替 福岡 一三九四三〇

印刷 凸版印刷株式会社
製本

©1989, Michiko Ishimure

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

0092-8923-0135

海と空のあいだに

石牟礼道子歌集

装 幀
著者自装
扉插画 飯尾都子

海と空のあいだに 目次

冬 の 山	9
満ち潮	17
道生	21
泡 の 声	29
わだち の 音	43
白猫	49
春蟬	53
うから	57
春衣	67
木霊	73
白痴 の 街	81

火を焚く	87
雪	93
汜れおつる河	99
藻	107
にぎり酒	113
指を流るる川	121
海と空のあいだに	127
鴉	133
廃駅	141
あらあら覚え	147
解題	167

友が憶えぬてくれし十七のころの歌

ひとりごと数なき紙にいひあまりまたとじらむ白き手帖を

冬の山

昭和十九年十一月

掃き残されし落葉しづかに地に着きてたそがれてゆく田浦の駅

ひとしきりはしやぎて君は帰りゆく野菊の花の夕映えのいろ

われを恋ひゐし人死すと聞く夕風の昏るる線路にりんどうの花

ゆゑもなく嫌悪湧きくる前の座席の昏あかき中年男

木洩れ陽に立ちのぼりいる椀の湯気ほのかにて束の間やすらぎに似し

この秋にいよよ死ぬべしと思ふとき十九の命いとしてならぬ

わが脚が一本草むらに千切れてゐるなど嫌だと思ひつつ線路を歩く

線路を離れ分け入りし山に湖水あり死にたき心いよいよつのる

なんでもない顔付きをして皆汽車に乗つてゐるなんでもない風にわたしもしてゐやう

わが命絶つには安き価なり二箱の薬が五円なりといふ

毒薬にゆだねられゆく命にてわれの一世ひとよはいじらしきかな

ひとさじの白い結晶がたたへるこの重い重い静けさを吞もう

吞みがたきもの飲み下したり反抗のごとく唾液のぼりくる

オブラードの昇汞胸に入り開くとき縫りつきぬしなんの稚な木

黒くなつた血液が音をたてて逆流するひとさじの昇汞を投じた躰が

死ぬことを思ひ立ちしより三とせ経ぬ丸い顔してよく笑ひしよ

穂芒の光なびける野の原に立ちて呼ばむとすれど声なし